

---

# とんがり帽子

トニー

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

とんがり帽子

### 【コード】

N1323B

### 【作者名】

トニー

### 【あらすじ】

あるあやしげな、とんがり帽子を被ったことからおこるコメディです。最後は優しくしめくくるハートフルコメディを作ってみました。

ドアをノックする音がしてから、女性の声がした。

「あの一、」

すみません」

「はい、」

何ですか」

俺はドア越しに声をかける。

六畳で家賃二万五千円のアパートの一室に住んでいた俺は、本当にたまにきた客、しかも女性に驚いたが、一応、用件をきかなくてはいけない。

「そのう。」

セールスなんですよお」

合格だった。

このような媚びを含んだものの言い方をする女性に、俺は滅茶苦茶、惹かれるのだ。

「何」

といて開けると、芸能人のような目鼻の整った、前髪が特徴的にくるりと反っている、おしゃれな栗色の髪をした女性が現れる。どこの事務員みたいなピンク系のスーツを着ていた。

「あの一。」

セールスなんですけど、きいてもらえますか」

「いくらでもきくよ。」

ただし、買うかどうかは知らないけれどもね」

「アハハハハ。」

お客さん、面白い」

「そうかなあ。」

で、何なの？」

「これです」

その女性は鞆から、黒いとんがり帽子を出してきた。

「えっ」

「これなんです」

「こんなのを売るのが」

「はい」

「これ、何？」

「とんがり帽子です」

「ふうん、で、どんな意味があるの？」

「幸運になれますよ」

「だって、こんなをつけて、外に歩けないじゃない」

「あつ、これは家の中で、一日、十分間、被ればいいんです」

「それだけでいいの」

「はい。これみてください」

帽子の裏地には、小さな光る石がはめ込まれていた。

「これ、タキオンです」

「ああ、よく雑誌とかで見る幸運の石みたいなやつね」

「はい」

「この帽子はタキオンの力が出てくるの」

「はい。そうですね。」

「普通よりも45倍くらい出ますから」

「どうやって測ったのよ」

「アメリカの大学で実験結果が出ているんです」

「ふうん。」

「正直、興味ないや」

「あ、そんなこといわないで買ってくださいよ。」

「どうですか？」

「いくらなんだい」

「500円です」

「安いなあ。

ホントにそんな安いの」

「はい、慈善事業ですから」

「へええ。」

それで、いいんだったら、買ったよ」

「それじゃあ」

というと、女性はとんがり帽子を渡す。

そして、お金を受け取ると、潤んだ目をして、こちらに顔を近づけてきた。

「すみません。」

あたし、一目惚れしちゃったかもしれませぬ」

「えええ。」

俺に

「そうです。」

電話番号が、ここですんで、電話してくださいね」

「わかった」

「あの〜。」

あなたの携帯も教えてよ」

「あ、そうだね」

そして、俺は彼女が去ったあとに、とんがり帽子をつけてみると、タキオンの力が働いたのか。

「キュイイイイイン！」

ウイイイイイイン！」

という音がする。

「あれ？」

帽子を外すと音がやむ。

気になるのでまた、つける。

「キュイイイイン！」

「ウイイイイン！」

と音が鳴って、しばらくすると声がする。

「夢の人生。」

「夢の人生」

俺は帽子を脱ぐ。

するとその声はやんだ。

「何だこれ」

俺は気持ちが悪くなって、帽子をゴミ箱に捨てる。

しかし、そのままというのも気味が悪いので、調べると、帽子にはセンサーがついていて、被ると、音声を発するようになっていたのである。

明らかに、元値の500円は越している。

どうしてこんな嫌がらせみたいな仕掛けをしたのか、わけがわからない。

それから数日後に電話がかかってきた。

「あの、帽子の方はどうですか」

「あれかい。」

捨てちゃったよ」

「そうですか」

「うん。」

だってさ、あれ、被ると何か、変な声が出たから」

「えっ！」

何て言っていましたか？」

「夢の人生、と言っていたなあ」

「わ、」

「ごめんなさい。」

会ってくれませんか」

「ああ、いいよ」

というわけで、俺は彼女と、近くの喫茶店で会うことになった。今度は彼女はカジュアルな服装をしていた。やはり、何度みても綺麗だ。

これは、俺が女性に餌えているからかもしれないが、いや、そういう状況でなくても、掛け値なしに綺麗だった。目に特徴があった。

まるで吸い込まれるような目なのだ。

情熱的であり、優しくもあり、どこかに聡明さと、育ちの良さを感じさせる多面的な輝きをもつ目であった。

「夢の人生、って言っていましたか」

「うん、

言っていたねえ」

「そうですか」

というと彼女は俯いて、頬がほのかな赤みを帯びていた。

「どうしたんですか」

「いや、何でもないんです」

とハンカチを出すと彼女は涙を拭いた。

「事情を説明してください」

「わかりました。」

実はあの帽子は、私の亡き夫が作った最後の作品だったので」

「えええっ、そうなの」

「主人は、小さな帽子屋をやっていたんですよ」

「帽子だけ売っていたのか」

「はい。」

彼は最高の帽子を求めて、世界中を旅して、ようやく巡り合ったのが、あのとんがり帽子の製法だったのです」

「そうなのか。」

俺、捨てちゃったよ」

「いいんですよ。」

主人は、言っていました。

『こんな帽子は売れないだろう。』

ただし、俺は、この帽子に、ある妖精を宿らせたんだ。

もし、ちゃんと宿ったのなら、

『夢の人生』

と云うことだろう。』

なんて言っんですよ。

おかしくなったのか、って思ったら、本当だったのねって」

「そうなんですか。」

けれども、後で調べたら、センサーがついていて、変な音と音声

が出るようになっていたよ」

「じゃあ、主人がそんなことをしたんですね」

「一体、どうして？」

「どうしてって、その、それは、主人の趣味ですよ」

「悪戯好きだったのか」

「そうなんです」

「って、おかしいだろう」

「はい、そうですね」

「さっきの、妖精の話はどうなったんだい」

「ごめんなさい」

「えっ」

「すべては、あなたに近づくために、ついた嘘だったの!」

「いや、嘘をつくにしても意味がわからないよ」

「お願い、私を見捨てないで」

「ちよっと、ちよっと」

彼女はいきなり抱きついてきた。

「待ってくれ。」

待ってくれ。

一体、あの帽子は何だったんだ？」

しかし、彼女は俺の胸に顔を埋めて泣いたまま、答えを言おうとはしなかった。

俺はそんな彼女を受け入れることにした。

そのまま俺と彼女は結婚をして、三十年の時が過ぎたのであった。

もちろんのこと、結婚してからは、良いこと悪いこと、様々なことがあったが、何とか二人で潜り抜けてきたのである。

幸福な家庭ということはできたであろう。

三人の子供を作り、子供たちはすべて、巣立って行った。

そして、二人でゆっくり余生を過ごそうと思ったときに、俺は彼女に、どうしても気になるあの、とんがり帽子のことをきいてみたのだった。

「お前は三十年間、いつだってこの質問をすると答えなかったが、今回だけは教えてくれ。」

あの帽子は何だったんだ？」

「あれ？」

「あれは、だから前の夫の発明品よ」

「発明品」

「あの人は、帽子屋なんていうのは、本当は嘘で、発明家だったのよ」

「そうなのか」

「で、この発明は、最高の作品だ、というのね」

「うん」

「この帽子を被ると、三十年間分の擬似人生を体験できる、というのよ」

「へ〜〜、

って、これって、じゃあ、何？」

「もう気付いたかな？」

「本当に、待ってくれよ。嘘〜」

「そうそう。」

この三十年間って、とんがり帽子を被ったあなたの見た夢だったのよ」

というと、彼女の姿は消える。

あたりの空間が白くなったり、青くなったり、様々な色が混じったりして、絵の具を溶かしたようになる。その多くの色の混沌の中で、俺は意識を失った。

気がつくくと、三十年前の部屋に俺はいて、とんがり帽子を頭に被っていた。

「うぎゃあああ」

あわてて、とんがり帽子をぶん投げると、ゴミ箱に捨てる。

時計を見ると、前に、とんがり帽子を被ってから、十分しかたっていないかった。

「うわああああ！！」

あの三十年間は何だったんだあ」

と俺は叫ぶ。

それから小一時間くらい、俺は茫然自失の状態であったが、急に電話がかかってきた。

「はい？」

「あのー、さっきの者ですが」

「あの帽子なんなんだよ！」

「あれは、亡き主人の発明品だったんです」

「それは本当なのか」

「本当です」

「それでどうですか？」

「何がだ」

「私ともう一回、三十年間を過ごしてくれませんか？」

電話の向うの彼女の声は少し震えているようであった。

「そうだなあ……」

俺はわざとひと間隔おくと、答えた。

「また、お願いします」

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1323b/>

---

とんがり帽子

2008年11月7日06時58分発行